#アンプde GO!! with Marshall season2

第5回

“アンプでギターを鳴らす大切さ”を読者のみんなに伝えるべく始動した『#アンプ de GO!!』。そのシーズン2の第5回目は、ELLEGARDENやNothing's Carved In Stoneのギタリストとして活躍する生形真一氏が登場してくれた！ 彼が近年愛用し続けているマーシャル・アンプとはどのようなものなのか？ そして、アンプを鳴らす彼流の考え方とは？ そのこだわりのポイントを語ってもらうことにしよう。

製品のお問合わせ先／ヤマハミュージックジャパン [http://www.marshallamps.jp]

生形真一 [Nothing's Carved In Stone /ELLEGARDEN]

ギターを持つのと同じくらい、自分のアンプを持つことは大事

――マーシャルと出会ったときに感じたことをまず教えてください。

生形：マーシャルを最初に弾いたときに思ったことは、とにかく音がデカいってこと。俺の記憶では地元のスタジオにあったJCM800だったと思うんですが、まったく使いこなすことができず自分の下手さ加減を思い知らされたのを覚えています。使うギターの特徴、ピッキングのニュアンスなどがハッキリと出るので。

――現在はJMP2203を使われていますが、そのアンプに辿り着いた理由は？

生形：ギターを始めた後、いろいろなアンプを試しましたが、やはりロック・サウンド、特にギターの歪みに関してはマーシャルより良いと思えるアンプはないので。マーシャルの中でもなるべくチャンネル数も少なく、ストレートでシンプルな構成のアンプが好みのポイントです。

――そのJMP2203のセッティングについては、どのようなこだわりがありますか？

生形：ライブかレコーディングか、そして会場やスタジオによって毎回変えてます。でも、ある程度音量を上げて低音がラウドに鳴るようにはしていますね。ミドルのツマミがわりとハイ寄りなので、トレブルとミドルのバランスは気を付けています。高音があまりキツくなりすぎないように。

――マーシャルのアンプ自体に抱いているイメージはどのようなものですか？

生形：世界で一番有名で、一番ラウドな音が出るギター・アンプってこと。好きなアーティストや曲、テレビや街で流れている音楽等で誰もが一度はマーシャルから出たギターの音を聴いたことがあるだろうというくらいスタンダードなアンプだと思います。

――最後に読者にアドバイスを！

生形：自分のギターを持つのと同じくらい、自分のアンプを持つということは大事だと思います。そのくらいアンプによって音は変わるし、自分の音というものを突き詰めることができると思うので。

Marshall JMP2203 & Vintage Cabinet

◀▼ファズ、オーバードライブ等の歪みや空間系エフェクトを多用する生形。そんな彼がメインで使用しているマーシャルは1977年製のJMP2203だ。トレブルを抑えつつ、ベースとミドルを上げたクランチ系のセッティングになっている点に注目してもらいたい。また、このヘッド・アンプの音を出力するスピーカー・キャビネットとして、セレッション・ビンテージ30にスピーカーか交換されている1972年製のマーシャル・キャビネットがセレクトされていることもポイントだろう。

Nothing's Carved In Stone Self Cover Album『Futures』

Silver Sun Records
【通常盤 2CD】DDCZ-9065
【初回限定盤 2CD+DVD】DDCZ-9063
【豪華盤 3CD+DVD+3LP+ピックセット】DDCZ-9067

Now On Sale!!!

▲Nothing's Carved In Stone 初のセルフ・カバー・ベスト・アルバムが遂にリリースされた！ ライブで進化し常にアップデートを繰り返してきたバンドの代表曲が、最新版としてリテイクされて収録。さらに配信にてリリースされた新曲2曲も収録され、通常盤では2枚組CDで全20曲を収録、初回限定盤＆豪華版にはライブ映像に加えてアルバムについての全員＆メンバー・ソロ・インタビューも収録したDVDもプラスされている。今作で生形が奏でるマーシャル・サウンドを是非確認して欲しい!!